

ナシの大苗育苗から定植後の管理まで

佐賀県果樹試験場 落葉果樹研究担当係 技師 児玉龍彦

佐賀県内においてナシ樹の高樹齢化、それに伴う収量及び品質の低下が指摘されています。今後、佐賀県のナシ産業を維持していくために、ナシ園地の新改植による「園地の若返り」は必要不可欠です。現状、改植後の未収益期間がネックとなり、改植がなかなか進んでいません。

この打開策として、未収益期間を短縮し、早期の成園化を実現させる方法である大苗を利用した改植について、これまで紹介してきました。この方法を利用して、4年ほど前から伊万里・大川地区で大苗の共同育苗が始まり、さらに本年からは伊万里・南波多地区でも大苗の共同育苗が開始されました。また、本年佐賀県で行われましたナシ全国大会を契機に、県内の多くのナシ農家に改植意欲が高まりつつあります。「今こそ実践」。ナシ全国大会のスローガン通り、ナシの新改植に取り組みましょう。

今回は、9月21日にJA伊万里本所で行われましたナシ生産振興大会で紹介しました「大苗育苗の方法及び定植後の管理」についてもう一度ご説明します。

1) 大苗の育苗

ナシの大苗育苗は、不織布製ポット（25ℓ）の中にピートモスを混和した土壌を利用します。大苗の育苗において最も重要なポイントは土壌の乾燥防止です。この点も含め、大苗育苗のポイントについて整理します。

①ポットへの苗木の定植、設置

ポットの大きさに合わせて穴を掘ります。大量に育成する場合はバックホーやトレンチャーなどで深さ30cmほどの溝を掘っておきます。溝に並べたポットの中にピートモスを3割ほど混ぜた山土を入れ、苗は殺菌剤で根部を消毒してから植えつけます。接木部は埋もれないようにし、ポットの上部が5cmほど地上に出て、土壌表面が地面と同じ高さになるよう調節します。掘り上げた土をポットの周りに埋め戻します。植付け後は必ずかん水を行って、麦ワラを敷き、支柱を立てておきます。（図1）

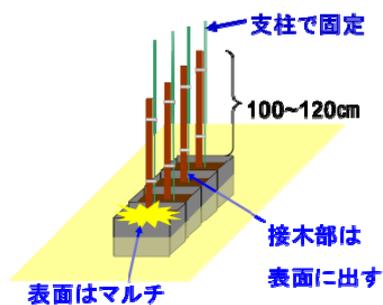


図1 ポットへの苗木の定植方法

②育苗時の注意点

ポットの植付けは、11月～12月上旬又は、2月下旬～3月に行ってください。

施肥は新梢が動き始めた後、4月頃になってから緩効性の被覆肥料等を施してください（1ポットあたり窒素成分15g程度）。（図2）

麦ワラで保水対策が万全であれば降雨で対応できますが、雨が降らない日が続く場合にはかん水を行ってください。

排水の悪い園地では梅雨時期に根を傷めるおそれがあるので、ポットを浅めに埋めたり、畝を立てるなどして水が溜まらないように工夫してください。ただし、梅雨明けからは乾燥し過ぎる恐れもあるので定期的なかん水も必要です。（図3）



図2 緩効性肥料の施肥

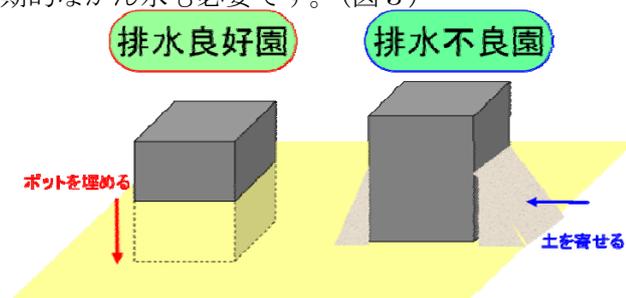


図3 ポットの設置方法

2) 大苗の定植

大苗を育てることができても、その後の管理次第で、生育が大きく変わってきます。改植には定植後の管理も重要となってきます。ここではその方法について整理します。

①定植の方法

定植の際は、まず幅1m×深さ30cmの穴を掘ります。その中に、大苗を設置し、根底に織布性シートを敷く形にして埋め戻します。埋め戻しの際の土壌は、ピートモス、ようりん、苦土石灰などを3割程度混和したナシ園として未使用の土を利用して下さい。また、接ぎ木部は地表面から上に確実に出して下さい。接ぎ木部を地表面から出すことで、地下部の根を地表面近くへ上昇させ、その後の根圏の管理を行い易くすることが目的です。さらに、埋め戻し後は土壌と根の活着を促すため、必ずかん水を行って下さい。

（図4）また、植え付けたばかりの苗木は非常に乾燥に弱いです。そのため、苗の株元にはワラなどのマルチを敷き、梅雨時期の極端な乾燥を防いで下さい。（図5）

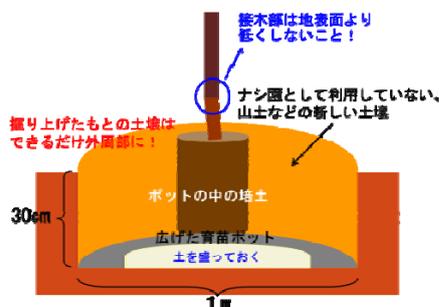


図4 大苗定植の方法



図5 定植後には株元にワラを！

②定植に適した環境

・定植1年目の秋には必ず土壤改良をする

ナシ樹の根は、十分に土壤改良を行った土壤条件では問題なく生育します。現在の定植方法の場合、株元付近は十分に土壤改良を行った土ですが、その外側は硬いままの土壤条件となっており、根の生育が定植2年目以降は妨げられています。の影響から、地上部の生育にも定植2～3年目に差が出てきます。(図6) これを避けるため、定植1年目の秋に、株元から1～2m(植え穴の外)の位置4カ所に20×20×20(cm)の穴を掘り、ピートモスなどの土壤改良材を混和させ、埋め戻し土壤条件の改善に努めて下さい。(図7)

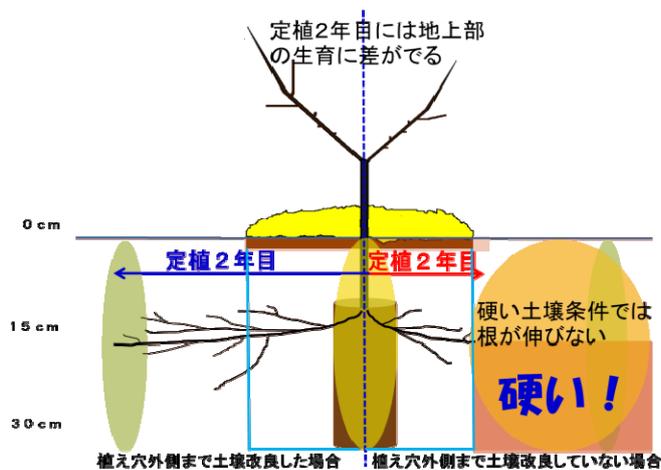


図6 土壤の硬さによる生育(地上、地下部)の違い



図7 土壤改良の様子

・捕植を避ける

植物の生育には日光が不可欠です。現状、大苗の定植は成木と成木の間に捕植の形で定植する形が主となっています。しかし、補植による改植を行っている園地のほとんどが日光不足により苗木の生育が遅れています。

・最低1列ずつ改植を行う

日当たりの心配も無く、硬い土壤による生育の抑制の心配のない定植方法として、列ごと改植する方法が挙げられます。列改植を行うことで、最低限の収量低下で、改植を進めていくことができます。

③ジベレリンの利用

大苗の生育を早めるためには、新梢伸長を目的としたジベレリンの利用が有効です。ジベレリンは満開10日前～満開14日後までにしっかりと伸長した新梢の基部に塗布して下さい。ただ、ジベレリンを塗布するだけでは、効果は少ないです。あくまで、誘引等の基本的な作業との併用で使用して下さい。

④整枝方法(図8)

・定植1年目のポイント

主枝の角度を60°程度に広げ、主枝先端の新梢を伸ばして下さい。この時、ジベレリンを利用することも有効です。また、主枝延長枝上に競合枝が伸びてきた場合は、必ず摘心を行って下さい。

・定植2年目のポイント

定植2年目で最も重要な事は、結果枝の確保です。側枝にジベレリンを塗布し、確実に翌年の結果枝の確保に努めて下さい。また、主枝の誘引も行い、樹形を作して下さい。

・定植3年目のポイント

順調に生育すれば、定植3年目からは結実が可能です。しかし、まだ枝作りの時期でもありますので、あまり欲張らず結果枝1本につき、4~5果程度に抑えて下さい。さらに、定植2年目同様ジベレリンを利用し、側枝の育成にも努めて下さい。

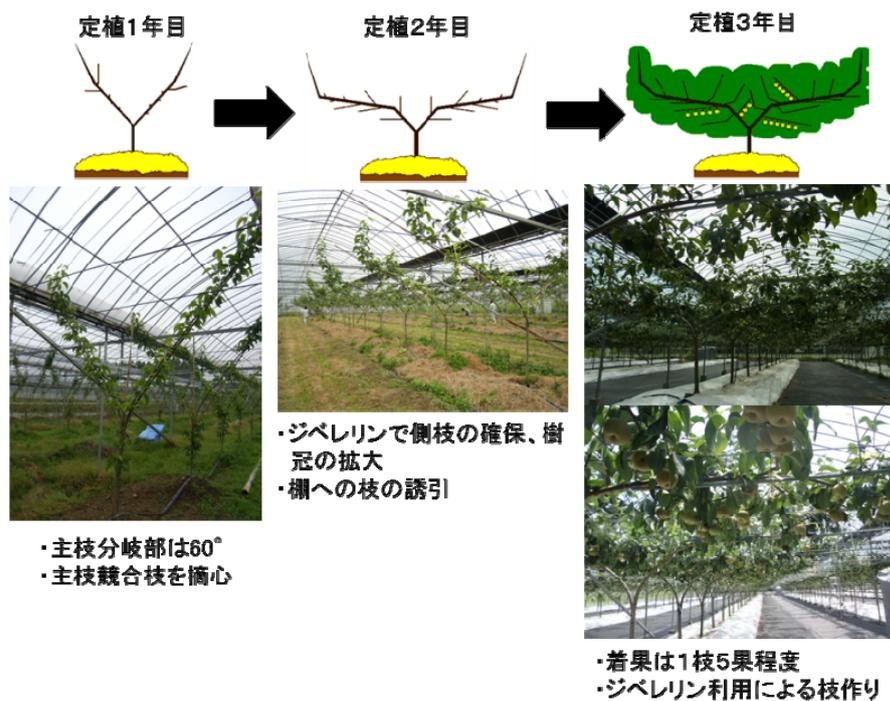


図8 定植後の整枝方法

以上、改植の流れとそれぞれのポイントについてまとめました。実際の改植に際しては、JA、普及センター等の機関にも相談の上、失敗の無い改植を進めていきましょう。